

音楽都市のエコシステム

Music City Eco system
ミュージックシティエコシステム

音楽都市インタビュー



High-Life

公益財団法人ハイライフ研究所

インタビュー 六弦詩人義家氏

日時：2023年8月11日（土）

場所：下北沢 MOTHER



六弦詩人義家（ろくげんしじん・よしいえ）

ギタリスト

「SHIMOKITA VOICE」実行委員長

1978年生まれ。本名河野義家。2011年より下北沢在住。プログレッシブロック、実験的、民族音楽など、多岐にわたる音楽をルーツとし、独自の世界観を構築する。キーボード奏者小滝みつとのユニットECSTASY TWINSで活動。2013年より「SHIMOKITA VOICE 2013」に関わり、2016年より実行委員長。

【SHIMOKITA VOICE】

2007年に下北沢再開発計画の道路予定地にかかっている劇場「ザ・スズナリ」と道路計画の見直しを求める「下北沢商業者協議会」（代表：大木雄高）が開催したシンポジウム&アートイベント。地元の人々が気軽にこの問題に触れられるように、ミュージシャンや演劇関係者、映画監督、ジャーナリスト、研究者、行政、商業者など立場の異なる人々が集まり、下北沢と文化、未来のまちづくりなど、開かれた場で対話を行う場を設けた。その活動の様子と下北沢のまちの変遷を収めたドキュメンタリー映画「下北沢で生きる 2003 to 2014」は2015年に公開され、2016年に再開発に対する訴訟が和解を迎えたことを受けて、ナレーションを担当した俳優・柄本佑のインタビューや前実行委員長の大木雄高と新実行委員長の河野義家が下北沢を探訪するシーンを追加した「下北沢で生きる 2003 to 2017 改訂版」がつけられ、毎年上映されている。

「SHIMOKITA VOICE」は

まちに対する文化的なアプローチを行う、下北沢ならではの運動体

—————「SHIMOKITA VOICE」について教えてください。

義家：僕が下北沢に初めて来たのは中学生の時。住み始めたのは2011年3月ですが、「生まれが下北沢なんじゃないか」と言われるくらいどっぷり……大木（雄高）さんが率いてきた「SHIMOKITA VOICE」という運動の実行委員長についているおかげで、まちに相当深く入り込んでいると思います。

「SHIMOKITA VOICE」は、2007年にスタートした駅前の再開発に対する反対運動……とはあまり言わないほうがいいと言われているんで……市民運動です。僕は“市民運動”という言葉があまりしっくりこないんで、自分なりに“文化運動”と言っているのですが、要はまちの景観を壊したくないという意志を文化的なアプローチで、「自分たちはこういふにやるんだ」というふうにずっと声をあげている……というのが僕の認識です。2007年に「スズナリ」という劇場で第1回を開催して以後、毎年シンポジウムとライブの二本立てを基本形としてずっとやっています。イベントをしたり映画も制作したりと、さまざまなアウトプットをしていますが、その母体が「SHIMOKITA VOICE」です。僕はミュージシャンという立場からまちに関わっている感じですね。

————— 義家さんのようにまちに関わるミュージシャンは大勢いるのですか。

義家：実行委員会（現在）の中ではミュージシャンは僕だけです。音楽ライターやミュージシャンの方も在籍していましたが、楽器演奏できる人はいっぱいいるので、そういう意味ではミュージシャンは大勢いるんですが、表立って活動しているのは僕だけです。あとは「スズナリ」の舞台部の方や大木さん、お店をやっている方、都市計画とかを勉強していたかつての学生たちもいました。SHIMOKITA VOICEに来ていただいたミュージシャンは、大友良英さん、カルメンマキさん、高田明さん、坂田明さん、リリー・フランキーさん……挙げたらきりがなくらいです。

とにかく最初はどのような運動体なのかイメージがつかめませんでした。中に入って初めて「あ、こういうことなんだ」と。

僕が関わったきっかけは、ネバーネバーランドのオーナーの下平憲治さんに声をかけてもらったからです。旅先の広島から帰る電車の中で電話もらって、その時、「どういう概要のイベントですか」って聞いたら、まず最初に「リリー・フランキーが出る、そのあとに黒田征太郎、中村竜也（フランキー・ジェットシティのドラマー）、田中泯」って言ったからもう、なんのこっちゃ？って……本当に加わってよかったなと思います。アーティストを束ねているのは大木さんですが、おそらく他にない演目。下北沢の底力、世界に通じるアーティスト性、文化レベルの高さをまざまざと感じた年でした。

その後、大友良英さん、吉本ばななさんなどが登壇されるイベントと、太田和彦さんとか松尾貴史さんとか大学の先生とかのさまざまな文化人に来ていただくシンポジウムの2本を主軸に毎年やっていました。

当初からずっと記録として撮り溜めていた膨大な量の映像データがあったので、2014年にそれをドキュメンタリー映画にすることにしました。年に1回、2日間の開催だけだと来られない人が必ずいるので、映画にすればDVD化もできるし、いろいろなところに届けられると思ったからです。それで、数ヶ月でつくったのが、「下北沢で生きる 2003 to 2014」で、「下北沢トリウッド」という映画館で上映しました。反応はとても良かったです。普段来られない人が来られる。映画館だとさらに来やすい。そして、2017年に「下北沢で生きる2003 to 2017 改訂版」をつくりました。DVDのジャケットの写真は荒木経惟さん、映画のナレーションが柄本佑さん、ジャケットの装丁は、亡くなったグラフィックデザイナーの真館嘉浩さんのアートワークです。

映画は2017年以降のメインのコンテンツになっています。じわじわと火がついて、駅前に新しくできた「K2」という映画館で去年の上映では月1回レイトショーをやったんですが、毎回超満員ですごい反応で……レイトショーで満席にするってすごいことで、上映後の登壇者には保坂展人区長も来てくれて、RIZEのKenKenとか大友良英さんとか、他のまちでできないパフォーマンスをずっとやっているんです。保坂区長は2011年に初当選してからほぼ毎年出席してくれています。反対派と言われるような運動によく出席してくれたなあ、と思います。それはやっぱり、まちを良くしたいという思いがお互いにあることだと思います。

僕が実行委員長になってからは大木さんとはまた別のアプローチの仕方、行政側や媒体に対して僕はソフトなんです。ある意味僕は大木さんより激しいかもしれないんですが、大木さんやみなさんが築いてきた運動体をより多くの人に知ってもらいたいというのがあって……これだけのことをやってきた下北沢が素晴らしいという誇りがあるので、それをみなさんに知って欲しい。開発された部分も僕は好きで、あながち悪いとは思っていません。ただ、いろんな感じ方があるから賛否両論あると思いますが、僕ややっぱり新しいものは取り入れていくべきだと思う。そういう意味でますます面白い時期に来ていると思います。

下北沢はカルチャーのつぼ。

生活しやすく、刺激もまちに溢れている

—————ミュージシャンにとっての下北沢は？

義家：僕は、最初に下北沢に来た時にもう、ここしかないと思いました。それこそ、いま住んでいる部屋は、初めて15歳でシモキタに来た時に路地を回って「ここに住む」と思った場所なんです。僕は小学校6年生の時にギターを初めて手にしたんですけど、ミュージシャンになることしか考えていませんでした。小学校の卒業アルバムにも「将来ミュージシャンになる」って書きました。だから、10代の頃にもう下北沢。妻も世田谷生まれで、子どもの頃にお母さんの手にひかれてシモキタの商店街に来ていたから、所帯を持つまちはもう、下北沢以外の選択肢はなかったです。

15歳の頃はイカ天ブームでしたから、それこそ『Hanako』などの雑誌がシモキタ特集とかやってたと思います。姉がその雑誌とかを見て、今度行こうか、って言うてくれたと思いますね。まさにバンドブームとかがあったと思います。僕は日曜日とか原宿のホコ天にアンプ出してギター鳴らしてるみたいなことしてましたよ。面白かったですね。いまはなかなか難しいですけど。

—————義家さんにとっては、どこが魅力だったのですか。

義家：カウンターカルチャーのるつぼというか……古本屋にビートジェネレーションの詩集が置いてあったりとか、店主のセレクションが見えてくるのがすごく面白かったし、インディーロックのCDとかもちょっと違う。文化的な気配は他の町より1ランク上かな。やっぱりちょっと違います。斜に構えているところがあるかも。バーとか、少し基礎教養を身につけて行かないと太刀打ちできないんじゃないかな、という……僕の中では岩波文庫とかを抱えて酒を飲んでいる人がいるようなイメージですね。ちょっと難しい話をしてくれるとか、バーに行くとみんなギター弾けたりするとか、それも面白いなと思いますね。

でも逆にいまは高円寺の方がかつてのシモキタの良さを残していると思います。シモキタはいま新しい商業施設とかもできていて、ロックのまちではなくなっています。開発による変化・影響みたいなもの……もともとブルースとかロックとか雑多な音楽があったまちかもしれないけれど、じゃあ、いまメインで何が聞かれているのかというわからない。まちを歩いている人の格好が、明らかかつてのシモキタの人たちと違うんで……。以前は、「この人たちはどういう音楽を聴いているのかな？」がもっとイメージしやすかったと思うんですよ。それがいま住んでいてもわからないというのは、地元根付いている人がどれだけいるのか……外から人は来るけど……っていう印象です。細かく区分けする必要はないんだけど、正直行ってどういう音楽が流れているまちなのかわからない。だからロックのまちとは言わないですね。ポップスでもないし、新しい音楽がどういうものかわからないけど。

—————新しい音楽が生まれていくまちだと思いますか。

義家：どうなんですかね。記憶とか印象に残る音楽がどれだけでくるのかな、と思いますけど。サブスクとか利用していてあまりにも情報がいっぱいあるなかで、マスターピースと言われる音楽がどれだけ出てくるのかな、と思いますけどね。消費はすごくされちゃっています。聞き流す分にはいろいろな音楽に触れて面白いんだけど、自分だったら一作でもバシッとした音楽をつくりたい。かつてはCDを一枚買うんでもお小遣いを握りしめて行ってドキドキしながら買ったけど、いまは簡単に手に入る。それはいい部分でもあるし……。

“シモキタだったらこの人”というような、象徴するようなミュージシャンもいないしね。いまで言うKenKenとかですけれど。シモキタ出身ですから、シモキタ出身を象徴するけど、彼らは全国を飛び回っているから、シモキタにずっといるわけではない。そう言う意味では割と“シモキタ=この人”と言うのは僕はあんまり……。

—————まちとミュージシャン結びつく、と言うのはもうなくていい？

義家：いや。どうなんですかね。メリットデメリットで言うと、あまりに多すぎて、みんな割と、居心地の良さでそこから出なくなっちゃっているんですよ。僕は意識的に外のまちに行きます。結局シモキタの中で完結してしまうのが一番怖いんです。シモキタの良さはたとえば楽器とかCDとかレコードとか書籍とかライブできる洋服とか、全部手に入って、飲みに行ったら今日はこんなライブがあって、って情報が入るところです。でもそこで完結してしまって井の中の蛙になるのが怖い。KenKenとか金子ノブアキさんとか金子マリさんとかは外に行った上でシモキタに戻って来て演奏すると、圧倒的に違うんですよ。もうホームタウンだから。その違いは絶対にでかいです。シモキタが好きだったら、外に出るべきですね。ホームタウンだからこそもう憎たらしいくらい差をつけるくらいの気持ちで行かないと面白くないですよ。

よくシモキタは登竜門的とか言われますが、それもあれけれど、そこを通過して全国に行ってまた戻ってくる、というプロセスがあって、そういう意味ではものすごく成熟した音楽シーンがあると思うんです。逆に言えば、入りやすいぶん抜け出しにくい。そこからパワーアップしていかないといつまでもある程度のところに留まる。それはやっぱりミュージシャンとして悲しいですよ。それで本人が良いんだっいたらいいけど、おそらくそれは自己満足。そういう意味では居心地がいいけど、出られなくなっちゃう。だから魅力的なまちです。

—————若いミュージシャンが東京で修行したいと行ったら、どこを推薦しますか。

義家：やっぱり下北沢ですね。生活することを考えたらシモキタがいいと思います。暮らしやすいからです。要は演奏はあくまで一日のうちの数時間。楽器、CD、衣装は一部であって、まず生活しやすいまち。それが何よりの魅力。結局はそこに行き着きます。音楽活動をする以前に、生活していくと言うのが大事ですから。そういう意味でもものすごく暮らしやすい。

あとは生活する中でも刺激があることです。まち歩いていて刺激がある。家の近くを歩いているだけなのに、毎日いろんなシャワーを浴びられるって言うのがすごくいいです。だってふらっと来て、大木さんとかに会ってビールが飲めるんですよ。やっぱり歩いてそれができるまちはここしかない。それがすごいいいです。なんで10代の時にこのまちが良いと思ったかという、歩いて楽しめるから。それは大きいです。歩いていて心地いいんですよ。車にも邪魔されない。考え事をしながら歩けるって、ものすごく貴重ですよ。いまこれだけ人が増えてもそれができるって、すごく恵まれていると思う。

音楽をつくるために必要なのは、思考する場所。

思考に刺激を与えてくれる環境

—————10年下北沢に暮らしていらして、SHIMOKITA VOICEもやっていらして、いま一番思うことは？

義家：SHIMOKITA VOICEも一定の年数をやってきて、これから同じテーブルについて話をしていかないと何にもならないと思うんですよ。これまでその下地をつくってきたプロセスを踏まえて、いま僕が実行委員長で行政や媒体とやりとりするというのはむしろ必然で、そうしていかないと、これまでやってきたことが台無しになってしまう。そういう意味で反対運動にしないというのは大事なことです。ただ、それはロジックの問題であって、やっぱり対面している人と話をしながら、いかにまちづくりに対してSHIMOKITA VOICEという運動体がこれまでやってきたことが少しでも一石を投じてきたかを伝えられればいいと思う。はっきり言って、運動体として役目がなくなる時期が来ていいと思っています。むしろ、そういまちになっていく原動力になっていたらそれでいいと思う。そこに固執はしてはいません。実行委員長をずっとやる必要もない。ただ、会話の糸口として今日もこうやって話をする機会があるので、そういう意味ですごく

ありがたいです。それもシモキタじゃないとこういう話題にならないと思うんです。それがまちの魅力かな。飽きないですよ。全然。

—————ミュージシャンとして、都市に欲しいという要件はありますか。音楽が生まれるために必要だと思うことなど。

義家：考える場所ですね。雑踏の中でも考える場所があります。僕は歩きながら考えるんです。いまはやっぱり茶沢通りを歩きながら考えることが多いです。本当は緑道とかでもいい。思考するのって大事です。そういう意味では歩ける場所が欲しいですね。音楽をつくる上でということもありますけれど、音楽のメロディを考えようとして考えることはないですね。それはもうつくり出しちゃうとバツとでてくるので……。そうじゃなくて、そこに行き着くまでに自分のコンディションを整えるために考える。人が周りにいても静かでもいいんです。でもそういう意味で、南西口のK2の前にベンチがあったりとかはすごく親切ですよ。途中で立ち止まって腰掛ける場所とか……。僕はあまり音楽をつくるために音楽を必要としていなくて、例えば、僕は美術が好きなんで、絵や写真を見た後につくることは多かったですけど、より質の高いアート作品とか見られるとこがあるといいですね。といっても、美術館をつくれとかいう話ではなくて、まちの中にグラフィティが描かれていたりとかという自由さがいいですよ。例えば、コンクリートの壁に一ヶ月間アーティストの作品が見られるとかペインティングしているとかでもいいんだけど……。そういうのがあってもいいかなと思います。

僕は家でヘッドホンで作業しますが、スピーカーで鳴らしても全然苦情は来ないです。築3～40年近いマンションで防音ではないですが、楽器を鳴らせる部屋なんです。もちろん夜中とかはやりませんが、スピーカーを日中、鳴らしても問題ない。だって、どちらかというと、外の音の方がうるさいですもん。防音のマンションとか家賃払えないでしょ。あんまりそういうのは必要ない。

朝起きて歯を磨くような感じで音楽をやったり演劇観たり、 顔を洗うように舞台を見に行ったりすること。要は生活の中に根ざしていること

—————音楽スタジオやスクールとかに関してはどうですか。いわゆる学校っぽくない学校みたいなものなど、あったらいいなと思うものはありますか。

義家：教える場所があれば、ミュージシャンにもいいと思います。

でも僕なんかは楽譜を読めないんで、いまになって譜面とか楽典を教えてくれる人がいたらいいなと思います。そもそも、ずっとやってくるとそこが抜けているので、いまとなったらそういう学校に通いたいなというのは正直ありますね。だからお子さんだけでなく、ミュージシャンがミュージシャンに教えるとか……。それはありだと思います。いま学校っぽい学校じゃないって言い方をしてくれたから僕もそう思うんで、そもそもシモキタにそういうシステムチックなのが合うかどうかって思っています。

ただ、いろいろな場所に練習スタジオがあるけど、どこに何があるかがわかったほうがいいですね。ネットを見ればわかるのかもしれないけど、利用者がいなくて困っているスタジオがあるかもしれないから、ここに何があるってわかったら、使いたい人がアクセスしやすくなる。ここは何時から何時まで空いてるっていう情報があつたら、お互いにメリットがあると思います。新しいのをつくるよりも、いまあるものにちゃんと利潤が回った方がいいと思いますね。あるものを使い倒すようにしたいですよ。いまの技術をそこに投入して既存のものを生かしていく……。そういうやり方をしたいですよ、新しいものをただつくるだけじゃなくて。新しいのをつくるのは簡単だけど、できたところでどんどん競合相手ができてしまう。

そういう意味で生楽器が弾ける場所があったらいいと思う。ライブやるだけが演奏じゃないんで。練習もそうですよね。そういう場所があったらいいですね。

—————下北沢は音楽家であることが自然でいられるまちだと感じました。

義家：やっぱり朝起きて歯を磨くような感じで音楽をやったり演劇観たり、顔を洗うように舞台を見に行ったりとか、要は生活の中に根ざしているものだと思うので。それこそお酒を飲みに行くのもそうですよね。シモキタの良さは会話の内容が別格だということですね。酔っ払いの話が歌みたいになっている。そういうのがすごく面白いまちです。だから、僕はシモキタにずっと居ようと思っています。住環境は素晴らしいですよ。恵まれていると思います。自分が選んでいる場所を気に入っているのは幸せだと僕は思っています。

High-Life

「都市×知」
音楽都市のエコシステム
Music City Eco-system

<研究メンバー>

服部 圭郎 龍谷大学政策学部 教授
紫牟田 伸子 株式会社Future research Institute 代表
水本 宏毅 株式会社読売広告社 都市生活研究所 エグゼクティブリサーチディレクター
榎本 元 公益財団法人ハイライフ研究所 主席研究員

<表紙デザイン>

伊藤 愛 株式会社ソフトマシーン

発行 2024年7月
発行所 公益財団法人ハイライフ研究所
〒104-0061 東京都中央区銀座1-8-14 銀座YOMIKOビル8F
TEL03-3563-8686 (代表) Fax03-3563-7987
<https://www.hilife.or.jp/>
©公益財団法人 ハイライフ研究所
©株式会社Future research Institute
